

フィリピン移民の大量強制送還に対するタンゴールミгранテの声明

2013年7月6日、入国管理局により、フィリピンの非正規（在留資格なし）移民の大量強制送還が行われました。このようなことはかつてなく、またその過程において手続違反、非人道的な扱いがなされた可能性があります。タンゴールミгранテ（移民を救え!）は2013年7月17日に声明を出しましたので、以下に掲載します。（笹本潤）

75人のフィリピン人非登録移民の「強制送還」に関するタンゴール・ミ格蘭テの声明

Tanggol MIGRANTE Statement on the “Forced Deportation” of 75 Undocumented Filipino Migrants

タンゴール・ミ格蘭テは日本に在留していた非登録フィリピン人75人の略式送還を弾劾します。これは明らかな人権侵害であり、国際人権法を無視したものです。タンゴール・ミ格蘭テは、移民、一時的移民、難民や避難民の権利を人権侵害およびあらゆる形態の暴力や虐待から擁護する法律家団体、NGO、宗教者団体、在日外国人団体および個人のネットワークです。

タンゴール・ミ格蘭テは、また、この件に関して「非干渉政策」をとり、意図的であるかどうかを問わず75人のフィリピン人の大量送還を急ぐ入国管理局に加担し、それによって彼ら／彼女らが自らの法的問題を解決するためにあらゆる形態の法的救済措置を追求するという個人的権利の侵害を放置し続けたフィリピン政府も弾劾します。

被害者や同じく収容されていた人々の話によれば、75人のフィリピン人は日本の様々な収容施設にいました。同意も警告もないまま、75人の収容者—成人男性53人、女性13人、1歳から5歳までの幼児8人など—は、7月6日の早朝、眠っていたところを起こされ、無理やり成田国際空港に連れて行かれ、警護のために同乗した60人の入国管理局の職員たちとともに、日本政府の負担によって日本航空便でフィリピンに向かうことになりました。

フィリピン出身の非登録移民が大規模にフィリピンへと一斉送還されたのはこれが初めてのことです。タンゴール・ミ格蘭テは、それを「強制送還」と呼びます。なぜならば、法的手続きを無視して略式で行われ、過剰な強制力と拘束力が行使されたこと、さらに重要なことは「すべての移住労働者及びその家族の権利の保護に関する国際条約」が定める非登録移民に対する公正で人間的な扱いに関する条項に違反しているからです。これらの75人のフィリピン人移住者は常習犯ではありません。彼らの罪—もしそれが罪だと呼ばれるならば—は唯一、ビザの有効期限よりも超過滞在したこと、あるいは有効な書類をもたずに日本に入国したことだけです。したがって、過度の強制力・拘束力の行使や実際の送還の過程で行われたことの明らかな不正行為は、日本がフィリピンなど貧困国出身の非登録移民をどのように扱っているかについて胸の痛む姿を示しています。

何人かの被送還者や収容者仲間の話は、送還された75人に対する人権侵害で満ちています。

第一に、被送還者のなかには適切な渡航書類なしで強制的に飛行機に乗せられた者もいます。フィリピン外務省のラウル・ヘルナンデス報道官でさえ、現地メディアに対して、有効なパスポートを持たない者にはマニラ到着後に渡航書類が発行されることを認めています。今回のものは「正常な送還手続き」ではなく、この強制送還の違法性をいかにも証明しています。東京のフィリピン大使館は、自分たちが

日本の入国管理局と適切な連携をとったと言いますが、これが真実ならば、なぜこのようなことが起こったのか説明する必要があります。

第二に、手錠など過度の強制力・拘束力の行使は不必要であり、徹底的に調査されねばなりません。タンゴル・ミグランテに届いた報告によれば、被送還者の一人はマニラに渡航させられることを拒んだため三人の入管職員に拘束されたときに打撲されました。また、ある被送還者の親族によれば、手錠がはずされたのはニノイ・アキノ国際空港で入国したときのことでした。「手錠の使用は最小限にとどめた」という在マニラ日本大使館職員の主張はこれと矛盾しています。

第三に、被送還者のなかには係争中の事案について裁判所の判決を待っていた者もいたと言われています。少なくともあるひとつの家族は仮放免の最中で、裁判所の最終的な判決を待っているところでした。証言によれば、子どもたちを含むこの家族全員が入国管理局に来るように言われたとのことですが、そのまま送還される日までそこに留め置かれました。自分の持ち物を整理したり、他の個人的な必要を満たすために、家に戻ることも許されませんでした。このことが、とりわけ友だちやクラスメートに「さよなら」を言う機会さえ拒絶された幼い子どもたちに、はかりしれないトラウマを負わせたであろうことは想像に難くありません。

しかしおそらく、より深刻な精神的ストレスおよびトラウマは、マニラに到着した直後から始まったことでしょう。長年フィリピンにいなかったということで、特に子どもたちは大きな課題に直面します。フィリピンの言葉を話せず、新しい環境に見ず知らずの者としてやってきたからです。被送還者のなかには20年から30年もフィリピンを離れている人もおり、行き場所さえないかもしれません。連絡をとる家族や友人がいなければ、現地に再び順応していくことは非常に困難でしょう。すぐに、生きていくための手段を見つけるのがいかに難しいかを改めて感じるようになるのは言うには及びません。

日本は長年にわたってアジア地域で最も厳しい入国管理政策をとってきた国のひとつでした。日本はほとんどあらゆる手段と方法で不法移住に対処し、なんとか入国した人々の権利を抑圧してきました。

例えば超過滞在の疑いのある人への「抜き打ち取締り政策」は犯罪の予防に役立っていません。外国人移民全般が犯罪者扱いされ、そのためにますます虐待や搾取を被りやすくなっていきます。言うまでもなく、この政策は個人のプライバシーを侵害し、有効な在留資格がある外国人移民にも明らかに屈辱を与えてきました。この政策は今でも行われており、外見が日本人のようには見えないすべての外国人が巡回中の入国管理局職員や警察官にさえ呼び止められる対象となってきたのです。このような国家政策は、調和のとれた社会の創造を助けるどころか、人種、国籍、ジェンダーの別なく、移民のさらなる周辺化と孤立化をもたらすだけです。

日本で暮らす移民の犯罪者扱いや非登録移民への非人間的な扱いは中止されねばなりません。日本はグローバル社会のリーダーですが、非登録移民の権利の尊重では遅れています。さらに言えば、日本によるフィリピン出身非登録移民の大量送還は、韓国や中東で進行中の移民への取り締まりに反対する大規模な抗議の直後に行われているのです。

私たちは人権の擁護者として、強制送還を中止することを日本政府に要求します。私たちはまた、7月6日の事件を徹底的に調査することで、日本の入国管理局とフィリピン大使館双方の送還手続きに問題がなかったかどうかを明らかにし、被送還者に対する人権侵害がおこなわれたという申し立てを調べ、さらには権力を濫用し、75名のフィリピン人の誰かに危害を加えた者を処罰するよう要求します。

法の支配にはいかなるときでも従わねばなりません。しかし、人権を守り、すべて人間の尊厳を尊重

することが常に優先されなければならない、とタンゴル・ミгранテは考えます。
非登録移民は人間であり、彼ら／彼女らの権利は人権なのです！

非登録移民の強制送還の中止を！

非登録移民の権利の尊重を！

滞日非登録移民の合法化を！

【補】・Tanggol MIGRANTE (タンゴル・ミгранテ) は「移民を守ろう」の意味のフィリピン語